

水の大切さりレレー

薩摩川内市立祁答院中学校 二年 吉永<sup>よしなが</sup>梨香<sup>りか</sup>

「何回言ったらわかるの。」

また言われてしまった。それも、今日だけで何回も。今日に限った事ではない。今までも何度注意されたらうか。母の怒っている原因は言うまでもない。わたしの「水の出しっぱなし」についてだ。

「水は無駄使いしないの。」

母に言われて初めて気付き、あわてて蛇口をしめるわたし。言われるまで、水の出しっぱなしに気付いておらず、注意されてから蛇口をしめ、それがわたしの習慣になってしまった。なおそうとしても、そうすぐになおる事でもなく、注意される日々が続いていた。

そんなある日のこと。いつものように水を無駄使いしてしまっていたわたしに母が声をかける。

「また出しっぱなし。」

「しまった」と思い、蛇口をしめる。

「ごめんなさい。」

かるく返事をして、その場から逃げ去ったわたしは、母がため息のようなものをついている気がしたが無視をして、テレビのある部屋へと向かった。なんとなくテレビをつけて、適当にチャンネルをまわしていると、一つの番組で手が止まった。それは、水がなくて脱水になっていている子供たち、病気にかかっている人たちの姿であった。また、水はあってもきれいに透明な水がなく苦勞している村、遠くの井戸まで小さな子供が水をくみにいかなといけないうような村。これらの映像全てが「水」があることの大切さ、ありがたさを物語っているようだった。そのような村に、井戸づくりの職人をおくり、水不足に苦勞しないようにしようという番組だった。職人は、水が出てきそうな場所を選び、充分な道具がない中で、ひたすら井戸をほり続けていた。村の人々も協力し、色々なハプニングがありながらも、一生懸命がんばっている姿を見て、

とても感動した。ついに少しずつにごった水が出てくるようになり、村の人々を呼んでセレモニーをすることになった。職人、他、井戸づくりにあらずさわった村の人々は、「子供たちが初めて見る水が少しでもにごっていたらかわいいそう」と言って、水がきれいになるまで寝る間をおしんで作業していた。次の日、水が姿をあらわすと、飲んだり、顔を洗ったりと、みんなの笑顔が輝いていた。井戸をつくった人も、使う人もみんな嬉しそうだった。「水」は、それほど大切なものなのだ。

日本では、蛇口をひねれば水でもお湯でも出てくる。それが当たり前になっているのだ。しかし、一部の国、地域はどうだろうか。蛇口をひねれば水やお湯が出てくるなど信じられないと思う人もいるだろう。そのような人々が、わたしを見たら……。水を平気で出しっぱなしにしているようなわたしを。悲しむにちがいない。いや、悲しみを通りこして怒りさえ覚えるだろう。わたしは決心した。絶

対に水の無駄使いはしない、と。それと同時に、水の大切さ、ありがたさを深く理解出来たような気がする。

「何回言ったらわかるの。」

怒りがだんだんと沸いてきた。

「水が無駄使いしたらダメって、あれだけ言ったのに。」

すると、

「ごめんなさい。」

と、妹の軽い返事。

「水は大切なんだから考えて使ってよね。」

「うん。分かった。」

妹は水の大切さが分かったのだろうか。

母からわたしへ、わたしから妹へ、妹から兄へ……。

今日もどこかで、「水の大切さリレー」のバトンはまわっているだろう。みんなが水に困らず、笑顔で過ごせる日を信じて。